

うねま
麦の畝間をかいまみる
—— 畑作用具シッピキについて ——

田 中 裕 子

はじめに

はじめてこのシッピキを見たのは、北埼玉郡大利根町道目で間もなく取り壊されるという蔵の中であった。この蔵の中に収納されていた様々な農具の寄贈を受けるための調査中のことである。

無床のオングや打棒が割竹でできたクルリ棒等の並ぶなか、単なる風呂鍬と思って手にした時のずっしりとした感触、実際の総重量は2.95kgであるが手に持った感じではそれよりも重い印象を受けた。引き寄せてみると本体（床）はその形が三角錐に近い。逆さに立て、柄を首に見立てるところ鋸びついているが全体に光沢さえ感じられて「綺麗」な農具であった。

「畑に播きものをする時に使う。」のだと聞いて、さっそく当館に収藏することにした。ここでは、このシッピキについて簡単に紹介してみたいと思う。

1. シッピキの使用方法（大利根町での事例）

まず、この寄贈資料がどのように使われていたのかみてみよう。

◎ 宇津木元子氏（明治42年11月6日生）からの聞き書き調査

話者は、資料を寄贈してくれた宇津木家の「おばあちゃん」である。昭和2（1927）年18才の時に大利根町細間から嫁いできた。その時には宇津木家ではシッピキはもう既に使っていた。実家にも同様のものがあったという。

シッピキは鍬と同じで、鍬の代わりに使ったものだという。後ろに引張ってあるき、その重さを利用してサクキリをするのである。

この辺りでは、畑に麦を播いてその畝と畝の間に豆（大豆）を播いた。「麦は17を刈れ。」といって田植前に早目に刈り取ったが、大豆は八十八夜を過ぎたころ播くので、どうしても麦の生育中に大豆を播くことになる。畝間の幅は1尺位と狭かったので豆のサクを切る為に鍬を振り上げると麦を傷めてしまう。それを避ける為にシッピキを使った。シッピキなら狭い土地でも簡単にサクが切れるのである。麦の畝間の高い方の脇をうまい具合に傾けて引くとすぐにサクがきれるという。確かに、鍬床を貫通している柄は、引く作業を長期間続けたため摩滅消耗しており、その様子から



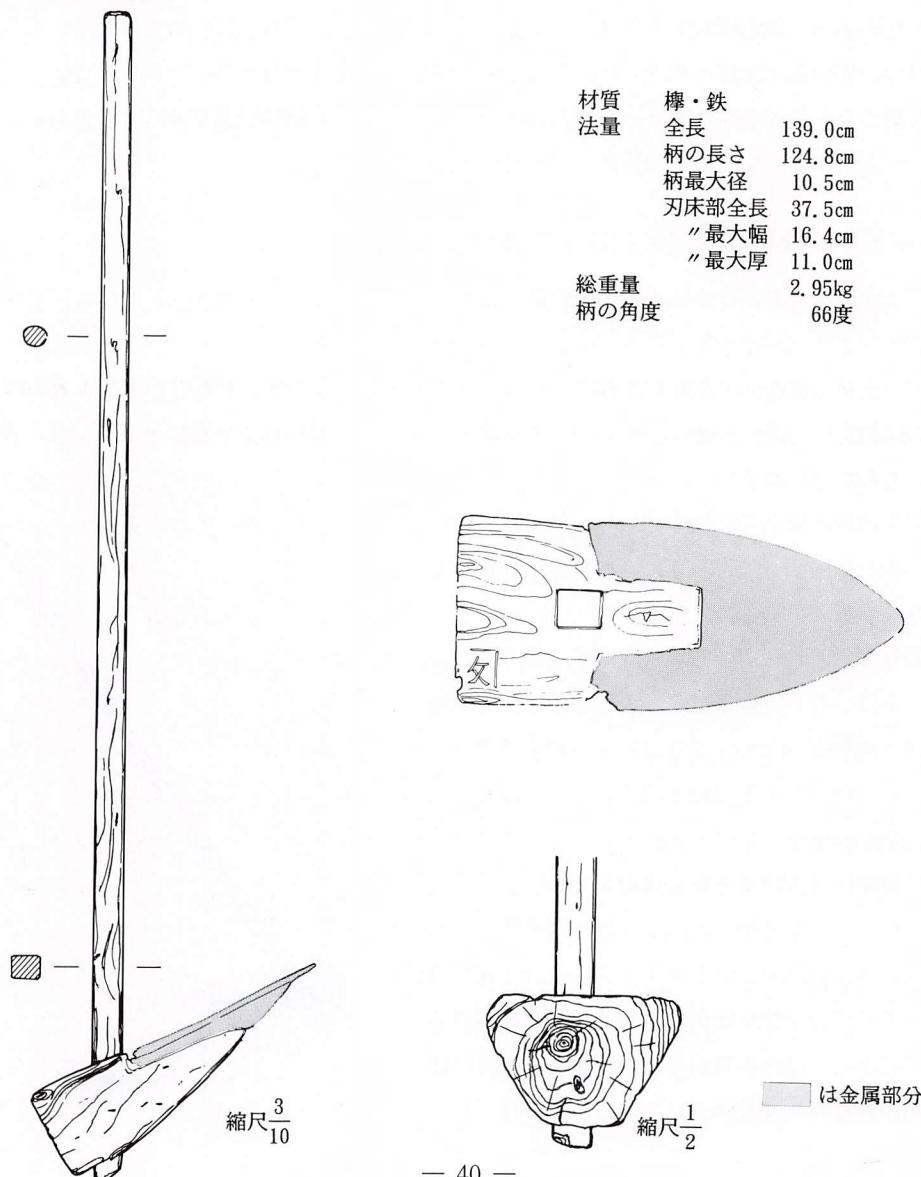
シッピキ（大利根町）

作業する人の体の右側に傾けて使用していたことが分かる。シッピキを使い慣れれば鋤よりも大分仕事が楽であったらしい。泥をかけるのもこの農具を利用していた。ただし水稻を作る陸田などでは土が重いのでシッピキは使えない。容易に引いて歩ける土質の軽い畠地が使用に適している。

実際の作業では、シッピキを持った男性がサクキリをし、その後をついて女性が豆播きをしていったらしい。また鳥類にその豆を食べられないようにすぐに土かけのため踏んで歩いたそうである。

この便利なシッピキはどこの家にもあったという農具ではなかった。畠地が少ないので所有していないので借用に来た。しかし、昭和初期に周辺地域にも用水が引いて畠を陸田化した。それまでは畠で大麦や陸稻を作っていたが、陸田にしてからは水稻を作るようになったのでシッピキの引き合いも絶えてしまったという訳である。

▷ シッピキ（大利根町）



◎小島あき子氏（大正9年9月6日生まれ）からの聞き書き調査

話者は宇津木家にはほど近い同町道目490の方である。

同家にはシッピキはなかったが、周囲の人が使っているのをよく目にしたという。大麦の畝の間に何かを播く時期は、その年にカッコウが初めて鳴いた時を目安にしており、土地の人はカッコウを「豆播き鳥」と呼んでいる。少し遅めの感があるが、このあたりでは毎年5月25日頃に鳴くらしい。

小麦の畝の間に何か播く時は、大麦の時より15日位過ぎてから播く。「小麦の中には遅く播け。」という。カッコウは「（豆播きの時期がきたぞ。）遅れている人は早く播けよ。」と鳴くのだという。5月25日頃はサクイレの旬だということである。

大利根町の耕地は利根川と中川に挟まれた低地のため水田がほとんどである。昭和30年代の半ばから、従来畠地となっていた自然堤防上の耕地を陸田化するようになり、昭和35年から45年の10年間にはたんぽが376ha増加し、畠が423ha減少している（註1）。

シッピキが使われなくなった背景に畠地の陸田化が挙げられているが、この記録は聞き書き調査の裏付けとなりそうである。

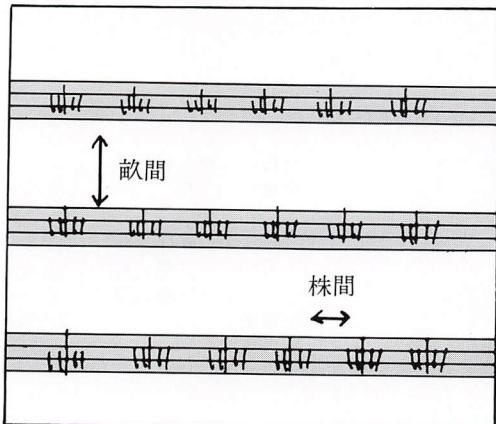
2. 県内での事例いくつか

(1) 行 田 市

当館蔵重要有形民俗文化財「北武藏の農具」の中にも同様の農具が収蔵されている。資料番号B-2 61「スジツケ」である。

これは、大利根町より上流の利根川に面した行田市北河原から採集した資料で、調査カードによると「畠に豆などの種を播くときに、たねをまくスジ（くぼみ）のスジツケに使用していた。両手で柄を持ち後ろにさがってスジを引いた。明治から昭和40年代まで使っていた。」とある。今回、小麦の畝間に大豆を作るための道具であることが確認できた。やはり、麦を傷めぬようにとの配慮から使用されたのであった。

名称も異なり重量も2kgと若干軽量であるが、使用方法はまったく同じである。ただし、軽量の



畝間と株間



シッピキの使用方法（畠は実際とは違う）

一因ともいえる鋤本体の厚みが大利根町の資料と比較して約半分の5cmしかないので大分違った印象を受ける。

北河原地区は利根川の自然堤防上にある。ここでも水田は僅かで、畠地では「冬は麦、夏は大豆」というサイクルになっていたという。昭和期に畠地が陸田化されると、徐々にスジツケは姿を消していった。「畠地の陸田化」は、やはりこの地域でも注目すべきことであった。

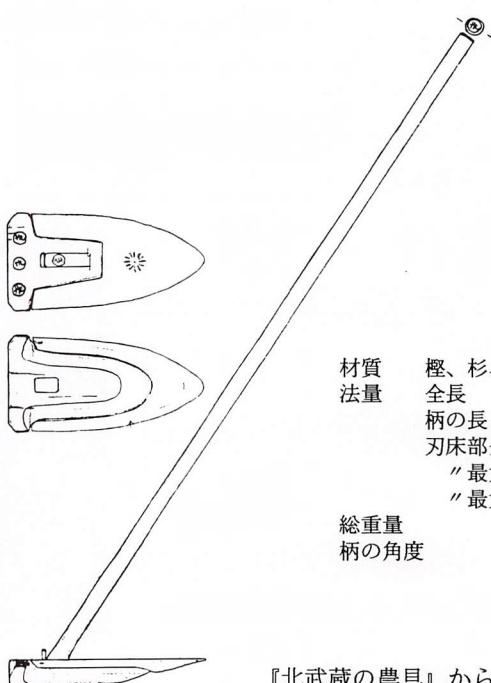
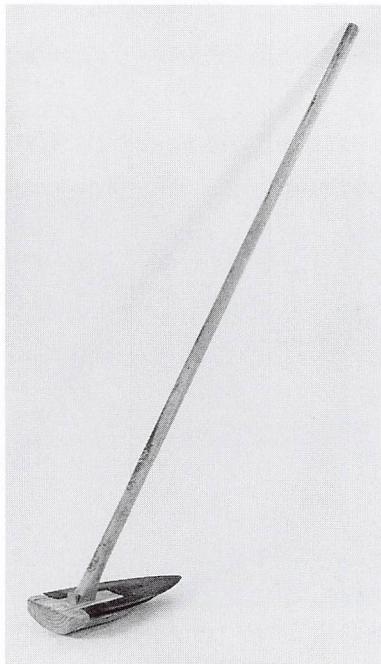
ほかには、同市渡柳でも明治一桁生れの祖父から昭和20年頃聞いた話として「マネヒキ」という道具を麦の畝間に大豆を播く時に使ったらしい。」との情報も得たがやや信憑性に欠けるものである。

(2) 北川辺町

大利根町とは利根川を挟んで対岸に位置する北川辺町でもシッピキは使用されていた。同町立民俗資料館には「ぶったて鋤」という名称で「麦作の間に大豆・小豆などを播く時、柄を肩に掛けて後ずさりしながら畝を作る用具。」（註2）として1点、収蔵されている。刃の付きかたや造りには細部で相違がみられ、また、仕事を楽にし鋤を安定させるため柄を肩にかけて使うことで全体に長い造りとなっている。重量は2.6kgと充分であり、柄との角度は大きく、起き加減である。木材は杉を使用しているので摩滅の度合いが激しく、傷みがひどい。（同資料館には九州の大隅半島に分布するケランテと酷似した大豆の土かけ用具も収蔵されている）

他に、改良型なのか一風変わった「ひったて鋤」も1点収蔵されている。柄以外は鉄製で、錐りにしたのか石を鉄線で縛りつけてある。全長ももう一方のぶったて鋤よりもさらに15cmほど長くなり今回紹介するものの中では最長である。また、柄の上方には撞木の用な^{じゆもく}のかボルトが通してある鍛練された刃の形は特異で山形を呈していてこれまでのものとはまったく違う。

▷スジツケ（行田市）



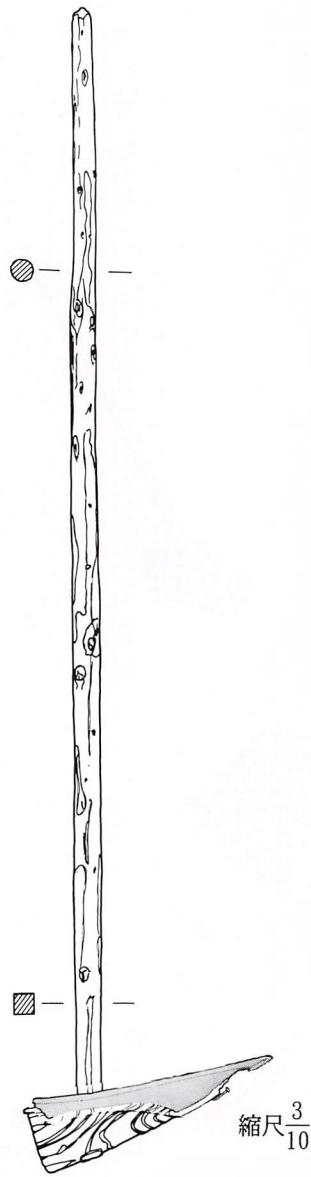
『北武藏の農具』から転載

材質 法量	櫻、杉、鉄	140.5cm
全長		135.5cm
柄の長さ		33.5cm
刃床部全長		16.4cm
" 最大幅		5.0cm
" 最大厚		2.05kg
総重量		55度
柄の角度		

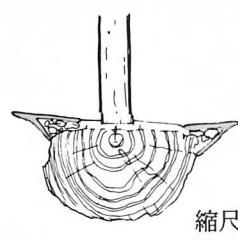
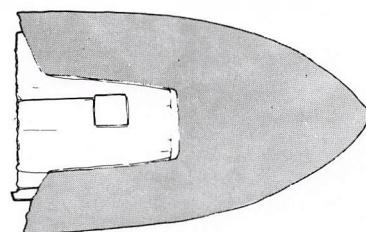
この資料は同町飯積から寄贈を受けたもので、そこを訪ねてみると利根川の土手が目前に迫っているところであった。

これを使っていた野中徳一氏は大正3（1914）年生れ、農具の使い勝手を良くするため自分でいろいろな工夫を凝らしてきた人である。この鋤も加須市大越の鍛冶屋に注文して作って貰ったが、安定性が高く引きやすいように撞木は自分でつけた。ここに布を巻いたり作業時に手袋をしたりして、引いたのだという。「軽くちゃひったたないから石を付けた。」そうだ。話者の記憶がやや曖昧であるが、肩に掛ける

▷ぶったて鋤（北川辺町）



材質	杉、鉄
法量	
全長	152.0 cm
柄の長さ	143.0 cm
柄最大径	9.8 cm
刃床部全長	31.8 cm
"最大幅	16.2 cm
"最大厚	8.6 cm
総重量	2.6 kg
柄の角度	78度



■は金属部分

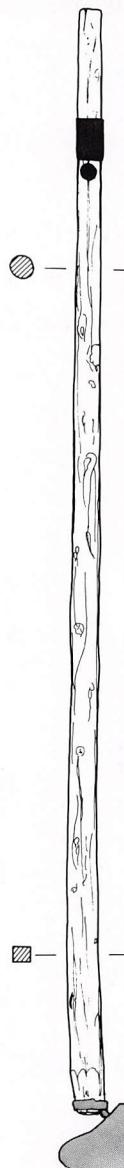
ことは無かったようだ。

これまでの例では刃先は土が付きにくいように鋳物製であったのに対し、当資料は鍛冶屋に作らせている。他にも注文者がいたということであるから特別注文ではないらしい。

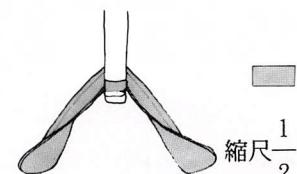
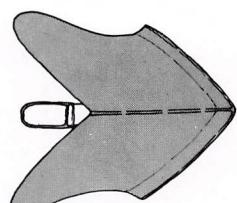
ここでも「ひったて鋤」は畠地を陸田化する以前に使用していたという。その頃の畠では、麦の間には豆以外にも陸稻も作っていた。どうしても麦の生育中にそれらの播種をしなければならなかったので、ひったて鋤を使った。ウネッパリという道具で測った一尺位の麦の畝間に男が引っ立てて歩き、女が陸稻や豆類の種をまく。土かけは足でサッサッとした。麦の畝間には陸稻も作ったので、その時の麦刈りは大変な重労働であったという。

北川辺町は、町の南側を南東に流れる利根川と東側を南流する渡良瀬川、北と西側は旧利根川の

▷ひったて鋤（北川辺町）



材質	櫻、鉄
法量	
全長	166.0cm
柄の長さ	150.7cm
刃床部全長	14.0cm
" 高さ	5.0cm
総重量	4.33kg (うち石の重量 2.3kg)
柄の角度	90度



縮尺 $\frac{3}{10}$

縮尺 $\frac{1}{2}$

堤防に囲まれた沖積低地上にある。町域には標高差はほとんど見られず、低平な河川の氾濫源で全体的に水田が卓越している。集落と畠は旧河道の自然堤防上に帶状に分布しており、昭和40年代、この自然堤防上の畠地が陸田化されたため田の面積が増加した（註3）。ここでも畠地の陸田化がこうした農具の消滅の一因として考えられようである。

3. 全国での事例いくつか

さて、シッピキのように人が後退しながら引いて作条畠立てをする農具は、全国にどのように分布しているのだろうか。

『民具実測図の方法1－農具－』の中では同類の資料を「いんが（引鋤）」として、熊本・宮崎両県南部から鹿児島県の大隅半島と薩摩半島北部にかけて、また中国四国の瀬戸内地方、それに神奈川県茅ヶ崎市・藤沢市・大和市・平塚市・伊勢原市・厚木市・秦野市・大磯町・中井町、さらに広義の利根川左岸地域として栃木県葛生町・茨城県岩井市・竜ヶ崎市・筑波郡矢田部町・新治郡出島町の分布が知られているとしている（註4）。

以下、報告書を参考にいくつかの事例を紹介してみたい。

まず、栃木県葛生町の事例である。

名称はサクヒキ。「土を起こす三角形の木製の台に柄を直角に取り付け、柄の中ほどには紐をかける木が取り付けられている。麦または野菜類の中耕に用いられた道具である。使うときは進行方向とは反対の方向に向かって土をかけていく。ほぼ、県下全域で大正末期頃まで使用されたものである。」（註5）という。「進行方向とは反対の方向に向かって」とは後退することであろう。柄の全長が188.0cmと長いので肩に掛けて使用したのだと思われる。用途は中耕のためとあり、間作については触れられていない。中耕とは、畠間を鋤でサクリ麦の根元に土を寄せる作業であるから、サクヒキを使用すれば仕事はかどったかもしれない。

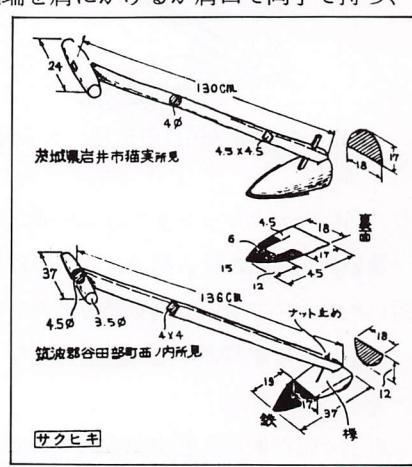
次に神奈川県の事例である。

「引鋤（いんが）」は畠作用具の一種で、畠の作条畠立てに用いられるものである。神奈川県の県央南部地域では、これをインガとかオンガとかよび、柄の先端を肩にかけるか肩口で両手で持ち、柄の根元に付けた縄を腰に結んで後退しながら畠の作条を行なう。」（註6）という。

「柄の先端を肩にかける」とか「柄の根本に付けた縄を腰に結ぶ」などして、一層の安定を図っていることが分かる。また、その分布も広いようなので今後の指標となる地域である。ここでの具体的な事例を知ることで、「引鋤」が分布する地域の特色をとらえることができるのではないだろうか。

つぎに、茨城県の事例である。

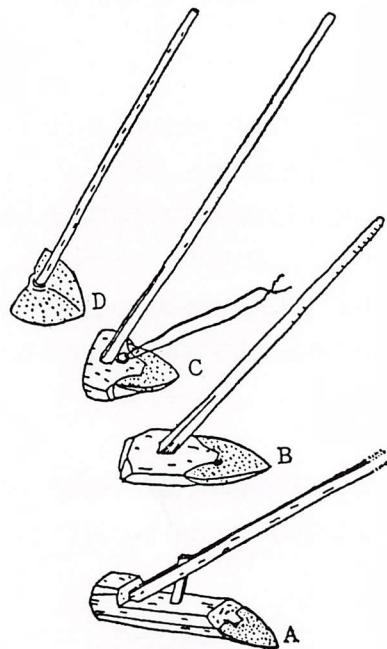
ここでの「サクヒキ」は右図に示されているようにこれまでの資料と形態が異なり、つぎに紹介する鹿児島県の資



サクヒキ『民具マンスリー』から転載



テビキの使用風景（徳島県石井町）



ナカヒキ 4種『民具の伝承』から転載

り、名称もナカヒッを主として変異が多く見られるという（註9）。

長い柄を肩にかけ、柄の付け根の鉄環から縄をのばして腰にまわし、体全体で引く形のものと、短い柄を両手で引いて退く形のものがあるらしい。

「小屋にある農具の中では最も大型なものである。」と紹介されている。

以上4県の例を文献中から列挙してみたが、これらは引鋤を形態上から分類した

A 刃床部が木と鉄製のもの

料と似通っている。岩井市や谷田都市では、この農具をサクヒキといい、柄の先端部にシュモクを付けここを持って後退しながら作条をする。

サクヒキは、麦の後にサツマイモを植えるために使ったり、耕運機で整地した後に落花生を植えるために用いられる。耕耘が軽い土壤でないとサクヒキは使えないという（註7）。

この記述からでは間作との関係は不明である。

最後に鹿児島県の例である、鹿児島県姶良郡牧園町の常畠では、以下のような輪作が行なわれているという（註8）。

12月初	麦播き
5月初	麦のサクの間に夏大豆播き
5月末	麦刈り
7月中旬	粟播き
8月	大豆収穫
10月末	粟収穫
12月初	麦播き

こうなると麦のサクの間に夏大豆を播き、夏大豆のサクの間に粟を蒔くのでナカヒキという農具が活用される。作物のない畠でも使うが、一般にはまだ作物がある時期に別の作物を作る時に使うようだ。やはり、後退しながらナカヒキを引いて使用する。ナカヒキの把手を両手で持ち、高さを調節しながらサクの深さを一定にする。播種はナカヒキで引いたサクに少しづつ種を落として播く。筋播きである。

薩摩半島一帯の畠作地帯には畠のウネタテ用に引きながら後退する系統の農具が新旧いろいろあ

- B 刃床部がすべて鉄製のもの
- C 刃床部の風呂の部分がもう少し長く、柄との角度が小さいもの
- D 刃床部と柄との間に鋤でいう鋤柱がはいったもの

の中（註10）では、AあるいはC・Dに該当するものであろう。名称や形態はやや異なるものの、この資料が全国的にある程度は分布していることが判った。

4. 歴史的にみたシッピキ

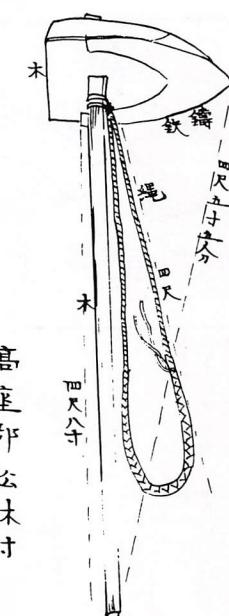
いわゆるシッピキは、歴史的にはいつごろから使用されているのであろうか。

明治38・39年の『農具一覧并図解』には、高座郡松林村（現茅ヶ崎市）・中郡岡崎村と小中村（現平塚市・伊勢原市）・愛甲郡厚木町（現厚木市）の項にこの農具と思われる資料の記載があり、それらはエンガー・オンカー・インガー・イングワと呼ばれている。いずれも柄の根元に付けた縄を腰に結わえて後退して用い、鋤先部は普通の鋤とは異なって鋸物製で、全体の重さは800匁（約3kg）から1貫目（3.75kg）内外とされ、用途は、各々「作入仕付ニ用ユ」「立毛作ノ間ニ蒔キ付ケル等」「畑作物間畦立用」「仕付用」となっていて大抵の農家では1戸に1挺から2挺あるとしている（註11）。

この『農具一覧并図解』は、明治38年から翌39年にかけて神奈川県農会が県下各地域の人々に依頼して調査した結果をまとめたものである。現在、柄の根元に縄を付けて使用する例は少ないが、形態的にも用途をみても「シッピキ」である。僅か100年たらず前のことであるが、この鋤がかつては広く普及していたことを知ることができる。

さらに、江戸後期の『農具便利論』（註12）には、「二挺掛け」と「源五兵衛柄耜」が紹介されている。この解説文によると

「二挺掛け」は、「畑に麦を蒔く時の専用具である。畦を三尺五寸幅につくり、そこに二条の筋をきり種子をまくには、たとえば『筋きり』で筋をきると一条ずつくるとはいえ、鋤でするよりは手軽ではやい。」また「綿を作った後に麦をまこうとするときは、綿の花を採ったあとの木を引き抜いて、そのあとを耕してからまくものである。— 中略 —（綿の花を）畑で全部開かせようと思っていると、麦をまくべき時期が過ぎてしまう。— 中略 —そこで、綿を畑に残したまま麦をまく方法が、今宮村の久左衛門という農民によって工夫され、この『二挺掛け』がつくられたのである。斧鋤や筋切りなどを用いて筋を切り麦をまけば、三人がかりで一日に三反まくのがむずかしいところを、この『二挺掛け』を綿の間に

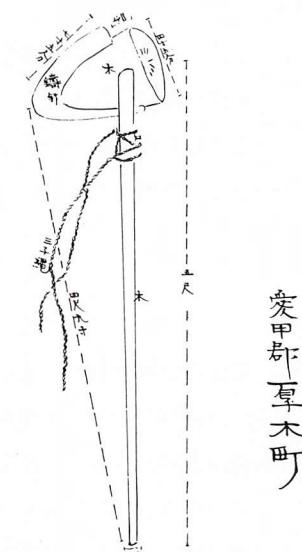


エンガー『農具一覧并図解』から転載

引きとおし筋をきれば、
八反は確実にまける。」
とある。

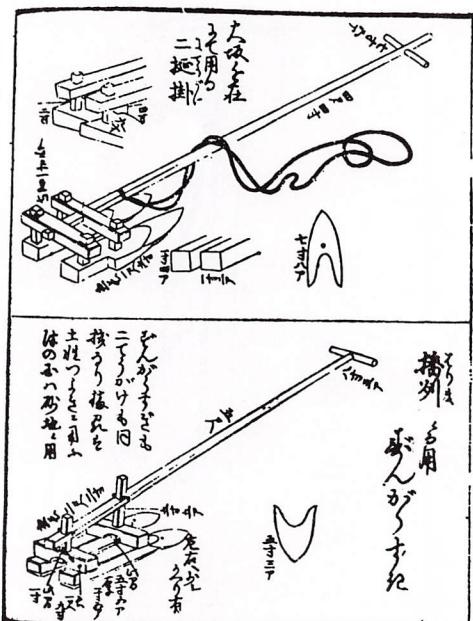
「源五兵衛柄耜」は、
「麦に培土をするときは、
鍬によって条間の土を打
ちやわらげ、両側の麦の
根元に土をよせるのが一
般の方法である。 — 中
略 — この鋤の頭につな
いだ縄を腰のうしろにか
けて、あとずさりしなが
ら一回通っただけで、麦
の根にちょうど具合よく
土寄せができるが、鍬で
するのに比べるとむらがなく、しかも土をふかくやわらげるこ
とができる手際よい。」といふ。

イングワ『農具一覧并図解』から転載



ただし、この中で二挺掛けは間作の用に用いたらしい記述が
あるが、三尺五寸を二条に筋切りするというこの農具を使ったのであるから、畝間が三尺五寸以上
なければ使用不可能であったろうと思われる。

また一方の「源五兵衛柄耜」は、形態的には茨城や鹿児島県のものとよく似ているが、用途は麦



二挺掛け『農具便利論』から転載



綿の中に二挺掛けをもて麦をまく図 (同左)

の土寄せとかまた野菜を播くときに耕すのに用いるとされていて、間作については記されていない。

他に類似するものには畦をつくるときの「筋切り」とか筋切り用や施肥用の筋を切るための「びわの葉」等があるが、用途も形態も異なりシッピキに匹敵する農具はみあたらない。ただ、畜力を利用した農具が普及する以前には、人力に頼った「引く」農具があって、そのうち、牛馬の立入れない狭い畠間で使用するシッピキが人力用として遺存しているのではないだろうか。

おとめ

シッピキは現在ではほとんど使われておらず、分布も希薄なようである。しかし、その特徴的な形態から作物の生育中に次の作物のためのサクキリを容易に行なえるので、かつては麦の畝間に陸稻を植えるために使用したり、麦の畝間に大豆を植えるために使用したりと、埼玉県のように麦作の盛んな県ではその間作に焦点を当ててみれば、それなりに重要な位置を占める農具であったといえよう。

また、麦の畝間には大豆だけでなく陸稻も作っていたという。冬作物の麦のサクの間に夏作物の陸稻などを播くというのが本来の姿なのかもしれない。今後、水稻栽培が普及する以前の畑作二毛作における農作物の組合せにも注意を向けたいものである。畠地を徐々に陸田化してきたことがこのシッピキの消滅に深く関わっているらしいが、このことも併せて考える必要があろう。農具が消滅する原因是単なる機械化だけではない。水稻栽培の普及とともに一掃された農具もあるに違ない。

とりあえず、利根川の左岸ではすでに存在が知られていたものが、右岸に当たる地域でも今回存在が確認できた。しかし、まだ調査が断片的で分布も面でとらえることができていない。基本的な用途は畝間の作条であるが、裸地畑の作条畝立てにも使用されていたのかどうか。どういったところで、どのように「シッピキ」が分布していたのか、まだまだ、麦の畝間を垣間みただけに過ぎない。今後も資料の補墳に努めていきたいものである。

拙稿を草するにあたりつぎの方々に貴重なお話をうかがうことができた。また、徳島県石井町「テビキの使用風景」の写真は大久根茂氏の御好意で掲載することができた。末筆ながらここに感謝の意を表するものである。

宇津木稔 宇津木元子 小島あき子 野中徳一 宮内隆仁 北川辺町民俗資料館

(敬称略 順不同)



源五兵衛柄耜にて畠を耕す図 『農具便利論』から転載

註

- 註1 埼玉県教育委員会 1979 『埼玉県市町村誌』 第16巻
- 註2 北川辺町町史編纂委員会 1989 史料集(12) 民俗『北川辺の民俗(二)』
- 註3 前掲書 註1に同じ
- 註4 小川直之 1988 「いんが(引鉤)」 神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第13集
『民具実測図の方法1-農具-』 所収 平凡社
- 註5 栃木県立郷土資料館 1976 『下野の民具 2』
- 註6 前掲書 註4に同じ
- 註7 河岡武春 1973 「サクヒキ瞥見」 『民具マンスリー』 6巻3号 日本常民文化研究所
- 註8 小野重朗 1985 『民具の伝承-有形文化の系譜(下)-』 慶友社
1989 『たがやす 写真でみる日本生活図引1』 弘文堂
- 註9 小野重朗 1966 『南九州民具図帖』
- 註10 前掲書 註4に同じ
- 註11 平塚市博物館編 1985 『明治38、9年農具一覧并図解』
- 註12 大蔵永常 1822 「農具便利論」 1977 『日本農書全集15』 農山漁村文化協会

追記

先日、栃木県立博物館の柏村祐司氏と群馬県館林市教育委員会の野口弥生氏から新たに情報をいただいたので追記としてここに紹介する。快く資料を提供してくださったお二人に深く感謝いたします。

◇ サクツケ 栃木県立博物館蔵 足利市高松町から採集

麦の畠間に大豆を蒔く時の畠立てに使用。後ろに引き下がりながら土を起こす。

全長約 140cm弱 総重量約 2.5kg

◇ サクタテ

「うなってある所をクワを使わないでサクをたてていく。または、作物の間を引いて、みぞをつくった。主に小麦の中に利用し、陸稻や大豆を播いた。」

館林市教育委員会発行 1987 文化財総合調査館林市の民俗 『おおしまの民俗』

◇ ひったてくわ

「陸稻まきのみぞ作りやひったてまき等に、昭和初期まで使った。」

館林市教育委員会発行 1985 文化財総合調査館林市の民俗 『みのやの民族』

※写真でみる限りでは、「サクツケ」「サクタテ」は、ここでいうシッピキと同様で「ひったてくわ」は北川辺町のそれとよく似ている。